

芭蕉元禄事業 奥の細道むすびの地「大垣」十六万市民俳句ポスト

平成二十九年十二月度 入選句（投稿総数二千五百四十二句・小中学投句数千八百二十一句）

特選

選者 説田 祐子

コスモスが風のメロディーつくつてる 大垣市 川瀬 里菜(小五)

作者はコスモスがいつぱい咲いている所に居て、そこには心地よい秋の風が吹いていたのですね。コスモスは茎も葉も細くしなやかで弱い風が吹いてきてもよく揺れます。その揺れるコスモスを見ているうちに作者の耳にはその揺れが「メロディー」のように感じたのですね。対象物をじつと見ているとその対象物が何かを語りかけてくるように感じる場合があります。コスモスという季語をそんなふうに捉えたよい俳句です。

ママの手がざらざらしたららふゆがきた 大垣市 高橋 怜生(小一)

寒い冬は水仕事を少ししただけでも手がかさかさ、ざらざらしますね。

きつと、作者のお母さんも水仕事などをよくされているのでしよう。

作者はそんなお母さんの手がざらざらになったことをよく見えています。そして、下五では、「ふゆがきた」とざらりと言っています。「寒そう」「大変」とは言ってはいませんが心の中ではきつとそう思っているのではないかと思えます。「冬」という季語の働きがよく生きている俳句です。

雪積もり庭が昨日と別の顔 美濃加茂市 汲田 翔吾(中三)

冬の寒い朝、起きたら庭には真っ白な雪が積もっていたのですね。それを見て家の庭がまるで

「別の顔」に思えたのです。「別の庭」ではなく「顔」としたのも庭が雪ですっかり変わってしまった

ことへの驚きと愛着でしょう。いつも見慣れている景色や出来事の変化を逃さずに捉えることは俳句作りには大切なことです。

秀逸

くるくるとおどっているねいちようのは 大垣市 子安 ゆうこう(小一)

おちばふむかさかさぱりぱりうたつてる 大垣市 松岡 拓(小一)

葉の落ちた木を見て思う生きてると 美濃加茂市 山田 凌平(中三)

落葉散るどこか心も落ちていく 美濃加茂市 大山 陽向(中三)

秋の空真っ赤にもえて夜になる 大垣市 松井 未来(小五)

きのしたでチビのどんぐりかなしそう 大垣市 川端 ひな(小二)

さつまいもいくぞひっぱれつなひきだ 大垣市 大塚 彩友美(小二)

外に出てさみしいぐらいの雪景色 大垣市 大塚 こうしろう(小四)

クリスマス空の上から子守り歌 大垣市 高田 りつや(小四)

紙をすく岐阜の伝統守るんだ 大垣市 岡田 真依(小四)

入選

サンタサンおとしちゃだめよプレゼント	大垣市	田中	心彩(小一)
どんぐりもくりきんとんになればなあ	大垣市	加藤	ほの香(小二)
もみじさんまつかな顔でとんできた	大垣市	高はし	なぎさ(小二)
白い息別れを告げた君と僕	美濃加茂市	大西	敦貴(中三)
白い息列車のように歩く朝	美濃加茂市	糟谷	翔(中三)
ふく風がほほをきりゆく冬の風	美濃加茂市	駒田	悠華(中三)
冬の空どこかさみしく雪が降る	美濃加茂市	前川	怜香(中三)
歌声が秋の空まで飛んでいく	大垣市	土屋	奈那実(小五)
冬の朝ふとんの中でダンゴ虫	大垣市	松原	大悟(小三)
持久走まつ赤な顔と白い息	大垣市	小川	慎太郎(小六)

入選

思い出のメロディーとどける冬の風	大垣市	一色	深生(小六)
寒いねとりんごのような君のほほ	大垣市	木村	妃咲樂(小六)
こたつではみんなの足が大げんか	大垣市	棚橋	花音(小六)
ゆきだるまいつみていてもうごきそう	大垣市	加藤	唯那(小三)
公園でおちばふみふみおんがかいかい	大垣市	しのだ	ふうき(小三)
ゆきだるまわたしの友だちもうひとり	大垣市	たなべ	ゆうか(小三)
かみをすくみんなのせなかたつじんだ	大垣市	木村	勁結(小四)
手ぶくろの指のすきまに風が吹く	大垣市	廣瀬	光雅(小四)
大根が雪の中でかくれんぼ	大垣市	伊藤	舜理(小五)
おはようと言う口からは白い息	大垣市	青木	琉空(小五)

選者吟

風花の舞うがごとくに児等も舞う

祐子